

日本の名作名文ハイライト

それから

夏目漱石

朗読 沙羅ん

出所 一語千夢 One-word 1000 dreams ~2

<http://saran-ai.seesaa.net/>

teabreak 編

それから 夏目漱石

(一)

誰か慌ただしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな俎下駄が空から、ぶら下っていた。けれども、その俎下駄は、足音の遠退くに従って、すうと頭から抜け出して消えてしまった。そうして眼が覚めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪畳の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中で確かにこの花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、四隣が静かな所為かとも思ったが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋のはずれに正しく中る血の音を確かめながら眠に就いた。

ぼんやりして、少時、赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見詰めていた彼は、急に思い出した様に、寝ながら胸の上を手を当てて、また心臓の鼓動を検し始めた。寝ながら胸の脈を聴いて見るのは彼の近来の癖になっている。動悸は相変らず落ち付いて確に打っていた。彼は胸に手を当てたまま、この鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる様を想像して見た。これが命であると考えた。自分は今流れる命を掌で抑え

ているんだと考えた。それから、この掌に応える、時計の針に似た響は、自分を死に誘う警鐘の様なものであると考えた。この警鐘を聞くことなしに生きていられたなら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、いかに自分は気楽だろう。いかに自分は絶対に生を味わい得るだろう。けれども——代助は覺えず悚とした。彼は血潮によって打たるる掛念のない、静かな心臓を想像するに堪えぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寝ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、この所を鉄槌で一つ撲されたならと思う事がある。彼は健全に生きていながら、この生きているという大丈夫な事実を、殆んど奇跡のごとき僥幸とのみ自覚し出す事さえある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から両手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬っている絵があつた。彼はすぐ外の頁へ眼を移した。その所には学校騒動が大きな活字で出ている。代助は、しばらく、それを読んでいたが、やがて、倦怠そうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落した。それから煙草を一本「吹かしながら、五寸ばかり布団を摺り出して、畳の上の椿を取って、引つ繰り返して、鼻の先へ持つて来た。口と口髭と鼻の大部分が全く隠れた。煙りは椿の弁と蕊に絡まって漂ふ程濃く出

た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がって風呂場へ行った。たった。

その所で丁寧な歯を磨いた。彼は歯並のいいのを常に嬉しく思っている。肌を脱いで奇麗に胸と脊を摩擦した。彼の皮膚には濃かな一種の光沢がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取った様に、肩を揺かしたり、腕を上げたりする度に、局所の脂肪が薄く漲って見える。かれは夫にも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白い程自由になる。髭も髪同様に細く且つ初々しく、口の上を品よく覆っている。代助はそのふっくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映していた。丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般であった。実際彼は必要があれば、御白粉さえ付けかねぬ程に、肉体に誇を置く人である。彼の最も嫌うのは羅漢の様な骨格と相好で、鏡に向うたんに、あんな顔に生れなくて、まあ可かっただと思ふ位である。その代り人からおしゃれといわれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り超えている。

(十七の三)

「御前は平生から能く分らない男だった。それでも、いつ

か分る時機が来るだろうと思つて今日迄交際つていた。しかし今度という今度は、全く分らない人間だと、おれも諦らめてしまった。世の中に分らない人間程危険なものはない。何を為るんだか、何を考えているんだか安心ができない。御前は夫が自分の勝手だから可かろうが、御父さんやおれの、社会上の地位を思つて見ろ。御前だつて家族の名誉という觀念は有っているだろう」

兄の言葉は、代助の耳を略めて外へ零れた。彼はただ全身に苦痛を感じた。けれども兄の前に良心の鞭撻を蒙る程動揺してはいなかった。凡てを都合よく弁解して、世間的の兄から、今更同情を得やうという芝居気は固より起らなかつた。彼は彼の頭の中に、彼自身に正当な道を歩んだという自信があつた。彼はそれで満足であつた。その満足を理解してくれらるものは三千代だけであつた。三千代以外には、父も兄も社会も人間もことごとく敵であつた。彼等は赫々たる炎火の裡に、二人を包んで焼き殺そうとしている。代助は無言のまま、三千代と抱き合つて、この炎の風に早く己れを焼き尽すのを、この上もない本望とした。彼は兄には何の答もしなかつた。重い頭を支えて石の様に動かなかつた。

「代助」と兄が呼んだ。「今日はおれは御父さんの使に來

たのだ。御前はこの間から家へ寄り付かない様になっている。平生なら御父さんが呼び付けて聞き糾す所だけでも、今日は顔を見るのが厭だから、この方から行って実否を確かめて来いという訳で来たのだ。それで——もし本人に弁解があるなら弁解を聞くし。また弁解も何もない、平岡のいう所が一々根拠のある事実なら、——御父さんはこういわれるのだ。——もう生涯代助には逢わない。何処へ行って、何をしやうと当人の勝手だ。その代り、以来子としても取り扱わない。また親とも思ってくれるな。——最もの事だ。そこで今御前の話を聞いて見ると、平岡の手紙には嘘は一つも書いてないんだから仕方がない。その上御前は、この事について後悔もしなければ、謝罪もしない様に見受けられる。それじゃ、おれだって、帰って御父さんに取り成し様がない。御父さんからいわれた通りをそのまま御前に伝えて帰る丈の事だ。いいか。御父さんのいわれる事は分ったか」

「よく分りました」と代助は簡明に答えた。

「貴様は馬鹿だ」と兄が大きな声を出した。代助は俯向いたまま「顔を上げなかった。

「愚図だ」と兄がまたいった。「不断は人並以上に減らず口を敲く癖に、いざという場合には、丸で唾の様に黙ってい

る。そうして、陰で親の名誉に関はる様な悪戯をしている。今日迄何の為に教育を受けたのだ」

兄は洋卓の上の手紙を取って自分で巻き始めた。静かな部屋の中に、半切の音がかさ／＼鳴った。兄はそれを元のごとくに封筒に納めて懐中した。

「じゃ帰るよ」と今度は普通の調子でいった。代助は丁寧に挨拶をした。兄は、

「おれも、もう逢わんから」といい捨てて玄関に出た。

兄の去った後、代助はしばらくして元のままじっと動かずにいた。門野が茶器を取り片付けに来た時、急に立ち上がって、

「門野さん。僕はちよつと職業を探して来る」というや否や、烏打帽を被って、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。

代助は暑い中を馳けない許に、急ぎ足に歩いた。日は代助の頭の上から真直に射下した。乾いた埃が、火の粉の様に彼の素足を包んだ。彼はぢり／＼と焦る心持がした。

「焦る／＼」と歩きながら口の内でいった。

飯田橋へ来て電車に乗った。電車は真直に走り出した。代助は車のなかで、

「ああ動く。世の中が動く」と傍の人に聞える様にいった。

彼の頭は電車の速力をもって回転し出した。回転するに従っ

て火の様に焙つて来た。これで半日乗り続けたら焼き尽す事ができるだろうと思つた。

たちまち赤い郵便筒が眼に付いた。するとその赤い色がたちまち代助の頭の中に飛び込んで、くる／＼と回転し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘を四つ重ねて高く釣るしてあつた。傘の色が、また代助の頭に飛び込んで、くる／＼と渦を捲いた。四つ角に、大きい真赤な風船玉を売つてるものがあつた。電車が急に角を曲るとき、風船玉は追懸て来て、代助の頭に飛び付いた。小包郵便を載せた赤い車がはつと電車と摺れ違ふとき、また代助の頭の中に吸い込まれた。煙草屋の暖簾が赤かつた。売出しの旗も赤かつた。電柱が赤かつた。赤ペンキの看板がそれから、それへと続いた。仕舞には世の中が真赤になつた。そうして、代助の頭を中心としてくるり／＼と炎の息を吹いて回転した。代助は自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行こうと決心した。